

① 数年前、台湾に招かれて訪問した際、おもしろい出来事がありました。ちょうど、プータンから「GNH(国民総幸福量)の伝道師が、そしてアメリカからCSA(Community Supported Agriculture)の代表が訪かしてきて、そこに僕が行くので、3名が1つの場でトークをする会を、市民の方が企画してくれました。まさに「X meets X」です。日本では「パーマカルチャー(PC)」と「トランジション・タウン」と「半農半X」が集う場を2015年、東京でおこなったことがあります。テーマは「新しい個としての生き方とコミュニケーションを単位とした社会作り」。そんなことを考えたPCセンタージャパン代表の設楽清和さん、すこい

「アイデアは交差点から生まれる」とは、フランス・ヨハンソンさんのことば(同名書籍『アイデアは交差点から生まれる——イノベーションを量産する「メディア・エフェクト」の起し方』CCCメディアハウス、2014年)ですが、本書がそのきっかけをつくり、またみなさんがそれぞれの地で交差点的な役割を果たしてくださるとうれしいです。

② 社会福祉法人佛子園の試みで知られる。高齢者も若者も子どもも障害のあるなしにかかわらず「ごちゃ混ぜ」で暮らせる街づくりをはじめている。

僕は「X meets X」と呼んでいます。めざすのはこれです。「Aさんがつくる野菜」と「Bさんという料理家」の出会いなど、どんな組み合わせでもいいのです。

「組み合わせ」について考える時、僕がいつもすごいなと思うのは、秋の恵みの代表である「栗ご飯(新米meets栗)」です。もちろん、昆布と塩も重要な材料ですが、栗ご飯を考えた人はすごいと思うのです。

組み合わせといえは、こんなのはどうでしょう。ぜんざいを甘くするのに、何を使うか？ふつうは「砂糖」と発想するでしょうが、答え



は「塩」です。甘くするのに塩を使うという発想！

田村一二という福祉の世界の先人が書いた『ぜんざいには塩がいる——障害児教育の原点』(柏樹社、1980年)という本に僕は影響を受けました。塩ついでに言うとう、スイカと塩もいいですね。

僕たちにはもっと「組み合わせること」「和えること」「混ぜり合うこと」を考えたり、実験する必要があるそうです。いま、「ごちゃ混ぜ」が福祉やまちづくりの分野で重要なキーワードになっていますね。

京料理だと、高級な素材同士の組み合わせの料理というのがあるそうです。たとえば、鯛と湯葉です。庶民の素材同士の組み合わせもあります。

僕はあまり使う機会はありませんが、あこがれのことばとして「マリアージュ(結婚の意)」というのがあります。AとBのマリアージュ。料理とワインの、和洋の、海の幸と山の幸のマリアージュ。料理に限らず、多様で斬新な組み合わせを創造をしていけること、これが未来において重要なのでしょうか。料理人というのはアーティストだな、とほんとうに思います。

脳科学者の茂木健一郎さんが5人のアーティストと対話した本『芸術の神様が降りてくる瞬間』(光文社、2007年)の中で「世界を変える魔法は『組み合わせ』の中にこそある」ということばと出会いました。